The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『阿閦仏国経』と『維摩経』の一考察

西野　翠

はじめに

生きとし生けるものに対する慈悲を強調する大乗仏教経典のなかで，市井の人維摩（Vimalakīrti）を主人公に据え，仏の大悲の如何なるかをドラマ仕立てで面白く説く『維摩経』は，大乗仏教文学中，秀逸な作品といえよう．

「一切衆生の救済」として働きだす仏の慈悲の源流には「仏陀の正覚の本質である智慧」があることは言うまでもなく，『維摩経』では，善巧方便の達人維摩が慈悲を体現し，維摩の対論者たる文殊菩薩が智慧の象徴として立てられている．

また，大小乗経典の比較でみると，現実的で実際的な修行に関連した教説が多い小乗仏教経典に対して，大乗仏教経典は超自然的で空想的であり，神秘主義(mysticism)とも評される内容である．『般若経』に次ぐ最初期の大乗経典である『維摩経』も，「仏国品第一」の冒頭における「五百の傘蓋をして三千大千世界を覆う一つの大傘蓋に変じる大神変」を始めとして，「嘱累品第十三」に至るまで奇跡的不可思議が満載である．商業都市ヴァイシャーリーに住む家長（gṛhapati）の維摩が，実は東方浄土阿閦仏国（Abhirati：妙喜世界）から来生した大菩薩だったという設定など，まるでSF小説の如くである．こうした大乗仏教文学のファンタジックな面は，魅力的な物語によって人々を惹きつけて教えを伝えるという意味もあるだろうが，それよりもむしろ「不可思議な物語によってでなければ表現し得ない深い宗教体験や思想」を伝えんがための工夫ではないだろうか．

本稿は慈悲をキーワードに，維摩の故国妙喜世界を伝える『阿閦仏国経』から『維摩経』を見ることによって，『維摩経』の趣意を捉え直そうとする試みである．

1．『維摩経』における慈悲

1．1．衆生救済こそ菩薩の本領　『維摩経』は「清浄仏国土経」と言える内容であり[1]，衆生救済を本願とする仏国土の建設が主テーマである．したがって，経

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

文のどこをとっても衆生への慈悲が説かれているといえるが，特に印象的な箇所として，「衆生という国土が菩薩の仏国土である」（仏国品第一），「菩薩には一切衆生に対する一人息子への愛情がある．… 菩薩たちの病は大悲より生ずるのである」（問疾品第五），「この（五濁の）世に生まれた菩薩たち，彼らの大悲は堅固であり…」（香積仏品第十），「菩薩たちは有情たちを清めるために，わざわざ不浄な仏国土に生まれる」（見阿閦仏品第十二），などが挙げられる．

こうした大慈悲を体現し衆生救済を成し遂げ得る存在として，仏にも匹敵する大菩薩が必要だった[2]．そこで，『維摩経』の作者は東方浄土阿閦仏国から大菩薩維摩を招聘したのであろう．

1．2．慈悲の発現者たる維摩の誕生　娑婆世界の教主釈迦牟尼世尊にとって，娑婆世界は穢土のまま浄土である．否，穢土なればこその浄土，「穢土即浄土」なのである．それが般若空の思想の真髄であるが，無明の闇に覆われた一般衆生には理解し難い．衆生の闇を払い，釈迦牟尼世尊の片腕となって働く力ある存在，それが維摩である．

また，それほどの大菩薩を在家居士として登場させたことについては，形式化した組織教団を批判する狙いもあったであろう．しかし，『維摩経』においては，大乗と小乗が対立的に争う関係で描かれているのではなく，「小乗は大乗の中に摂取されていく」[3]という形で示されており，大乗によってこそ衆生は済度されるという点が強調されている．

鳩摩羅什は『注維摩詰経』の冒頭で，維摩について以下のようにコメントしている．

> 「什曰く．維摩詰は秦には浄名という．即ち五百童子の一なり．妙喜国より来たりて此の境に遊ぶ．応ずるところ既に周くして，将に本土に還らんとするに，其の淳徳を顕わし，以て群生を澤（うるお）さんと欲す．」

この羅什の言によるならば，維摩は為すべきことを為し終えて将に故国に還ろうというときに，善巧方便を駆使し，仮りの病を現じて，「不二の法門」「不可思議解脱の法門」を打ち立てたことになる．その一大ドラマの一部始終を描いたのが『維摩経』である．

2．『阿閦仏国経』から見る維摩の姿

2．1．不動如来のもとで覚りを完成した維摩　維摩の前世が明かされるのは，経典の終わり近く「見阿閦仏品第十二」においてである．舎利弗の質問に答えて

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

世尊がこう言われた.「この良家の子は《すぐれた喜び》という世界の阿閦如来のところから来たのだ」と．維摩が阿閦仏国で修行を完成したということは，当然ながら阿閦仏国に生まれたということであり，それは「不動如来が菩薩であったときの行をすべて見習うべきである」[4]（見阿閦仏品第十二）という条件を満たしたということである．即ち，維摩は「不動如来に匹敵する修行」を完成しているのである．

ところで，『阿閦仏国経』は浄土系経典の中で成立が早く[5]，『無量寿経』の四十八願のようにはっきりした形で願は読み取れず，願数についても諸説ある．最初に，大目如来のもとで一比丘として立てた願は，「もし私が《たとえわずかの衆生に対してでも怒りあるいは瞋恚あるいは激怒をもった心を起こしたならば》，私は……仏・世尊たちを欺くことになってしまいます」に始まる８ヵ条で，内容は十善戒に集約される基本的な戒律である．このような誓いのもとで修行に励み，決して瞋恚の心を起さないものとなったとき，その比丘は「阿閦（Akṣobhya：不動）菩薩」と名づけられた．菩薩として更に10余りの願を立て，営々と修行を続け，遂に大目如来によって成仏を保証される．その後も立ち止まることなく行に励み，「諸々の仏国をへめぐり，倦まず弛まず法を聞き」[6]，無量の時間の果てに無上の覚りを得て阿閦仏（不動如来）となり，清浄仏国土を完成させる．それが阿閦仏国（妙喜世界）である．

２．２．維摩の故地はなぜ阿閦仏国か？　それでは，維摩の故国としてなぜ阿閦仏国が選ばれたのか．それを考えるうえでヒントになるのは，『維摩経』における「浄土建設理論」[7]である．釈迦牟尼世尊にとっては，実はこの土がそのまま浄土である．見る者の心が汚れているから穢れた土と見える．維摩は，心が汚れ病に冒された衆生に対して，「病の根本原因は《対象を捉えること（*adhyālambana*）》である．対象を捉えることを離れ，不二（*advaya*）の智慧を獲得し，病なきものとなれ」と強く訴えている[8]．この「不二」は「不動」と同意である．対象を捉えたら主客が分離して二となり，二となったところに好悪の感情が起こり，そこに瞋恚の心も起こってくるからである．したがって，決して二に分かれない境地を完成された不動如来の阿閦仏国こそ，「不二の法門」を打ち立てる維摩の故地として相応しかったといえよう．

ちなみに，大鹿實秋博士は，「人間的思議になずんだ分別から人間を解脱させるために，人間界を離れた別世界の，人間の思議を絶した不可思議に依らなければならず，そのために維摩を阿閦仏の妙喜世界から来生せる菩薩とした」[9]との

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

見解を示されている．人々の固定観念を打破し，固定観念の枠に収まらない「空・不二」を教示せんがために他方浄土が導入されているのかもしれない．

2．3．「不動＝不二＝慈悲」という構図　「慈悲の実践は人が自他不二の方向に向って行為的に動くことのうちに存する」[10]という見方は間違いないであろうが，維摩が教える真の不二は「対象（*ālambana*）を捉えることを離れること」であり，自他という考えさえ起こらない境地である．大乗仏教が理想とする「無縁の慈悲」はそこに生まれる．不動如来から，不動すなわち不二を学んだ維摩なればこそ，娑婆世界の頑迷な衆生救済という「無縁の慈悲」を行ずることができたといえよう．

3．『維摩経』の浄土教的側面

3．1．「阿閦仏国への往生の勧め」をどう理解するか？　『阿閦仏国経』に語られている阿閦如来の国はまことに桃源郷そのものであり，一見した者は誰でもその浄土に生まれたいと願わずにいられない．世尊は，「願いを起こしたものは皆，阿閦仏国に生まれる」（見阿閦仏品第十二）と予言している．一見，阿閦仏国への往生の勧めかと思えるこの一節は，現世浄土を説く『維摩経』の主張と抵触するのではないかとも思われるが，実は，麗しい浄土への憧憬を起こさせることこそが，現世浄土建設の手立てとなっている．阿閦仏国の数々の美点の幾つかは『維摩経』「仏国品第一」で舎利弗が娑婆世界の欠陥として指摘している項目の裏返しであり，総じて，阿閦仏国を反転した姿が娑婆世界といえる．阿閦仏国の美しい姿に照破されて娑婆世界の穢れが炙り出され，「その穢れを離れて浄土建設に邁進せよ」という声が響きわたる．「浄土に救われていく」のではなく「浄土を持ち来る」のが『維摩経』の主張であり，維摩は浄土（阿閦仏国）と穢土（娑婆世界）の懸け橋となっている．

3．2．易行道ではない不二法門　『維摩経』の衆生済度は，あくまでも釈尊の教え「空・不二の法」に目覚めることを根本とする．空においてこそ，無縁の慈悲が実現し，あらゆる衆生が救われていくからである．しかしながら，そうした「空の実践」「無縁の慈悲の実現」は容易ならざるものであり，凡夫の力の及ぶところではない．『維摩経』では，その困難な道（難行道）を踏み行くための道筋を示し鼓舞してはいるが，いわゆる易行道は用意されていない．ただ，大菩薩維摩が清浄な故国を捨てて，衆生救済のために来生しているというところに，救済の宗教としての浄土教の片鱗を見ることはできるかもしれない．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

おわりに

『阿閦仏国経』から『維摩経』を読むことにより，従来の在家の居士維摩というイメージは後退し，救済者維摩の姿が立ち顕われてきた．維摩は，「真理はあなたがたを自由にする」（「ヨハネの福音書」8章32節）と約束するイエス・キリストさながらに，「不二の法門をくぐるなら，あなたがたは煩悩を離れ，心清いものとして浄土に住むであろう」と言っているようである．

大乗仏教では，「慈悲の実践は，慈悲の実践という意識を越えたところにあらわれる」と説く．つまり，慈悲行は個我のはからいを越えたところから現われ出るということである．これは，『新約聖書』におけるパウロの言葉「我キリストと共に十字架につけられたり，もはや我生くるにあらず，キリスト我が内に在りて生くるなり」（「ガラテヤ書」2章21節）を髣髴させる．個我の意識を越えるのは至難の業である．しかし，『聖書』に出会った者がキリストを仰ぎ見て十字架の道を行くように，『維摩経』に出会った者は，維摩菩薩に随順し，たとえ遅々たる歩みであっても困難な道を歩み，その先に光を見るという「信仰」の視点が経典研究においても重要ではないかと考える．

1）道掖の『浄名経集解関中疏』に引用された羅什の見解に，「経始終由於浄国．故以仏国冠於衆篇也」とある．これによると，羅什は「維摩経」の始めから終りまで「浄国」を主題として展開しているとみて，最初の章を「仏国品」と名づけ，しかも「仏国」は「維摩経」の衆（全体）に冠せられると考えていた．羅什は「仏国品」に説く「浄土の行」が単に「維摩経」の初品だけでなく，経を貫く中心課題であると考えていたのである．参考：木村宣彰『注維摩経序説』（真宗大谷派宗務所出版部，1995年），169-170ページ．

2）「慈悲は仏教の実践の面における中心の徳である．『慈悲は仏道の根本なり．』慈悲は仏そのものであるとさえもいわれる．」（中村元『慈悲』，平楽寺書店，1963年，1ページ）

3）参照：橋本芳契「維摩経の原型について」（『印度学仏教学研究』Vol. 3-1, 1954年，311ページ）

4）この阿閦仏国往生の条件は『阿閦仏国経』「仏般泥閦品第五」（支婁迦讖訳）に同一の表現が見られる．「当に阿閦仏の昔に菩薩道を求めし時の行を学ぶべく，当に是の如きの意願を起こすべし，『我をして阿閦仏刹に生ぜしめよ』と．」（T313, 761b）．

5）経典成立史的には『阿閦仏国経』は「小品般若」に先行し，般若系経典の「成就衆生浄仏国土」および「常楽欲生他方清浄仏土」の思想には『阿閦仏国経』や『大阿弥陀経』など他方浄土建立思想の影響があるとの指摘もある．参照：赤沼智善『仏教経典史論』（法蔵館，1981年復刻）

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

6）『八千頌般若経』には阿閦如来のもとで暮らす菩薩たちに関する記述が散見される（Vaidya 本 *Aṣṭa-sāhasrikā prajñāpāramitā* で阿閦如来に関する記述は9箇所確認される）．例えば，「その仏陀の教化領域からその他の仏陀の教化領域に移り，仏陀世尊たちの住んでおられる多くの仏陀の教化領域のあれこれをへめぐる」（梶山雄一・丹治昭義訳『八千頌般若経 II』，中公文庫，181-182ページ），「（不動如来の修行を）忠実に模倣しながら暮らしている菩薩乗に属する人々」（同書，275ページ）という表現からは即座に維摩の姿が浮かんでくる．『阿閦仏国経』を熟知し，『八千頌般若経』を信奉する人々の中に，「妙喜世界から穢土に来生する維摩」を生み出した作者がいたのかもしれない．

7）拙稿「『維摩経』における浄仏国土思想について」（『大正大学大学院研究論集』第30号，2006年）

8）拙稿「『維摩経』における救済 —「維摩の沈黙」を巡って」（『印度学佛教学研究』Vol. 56-1, 2007年）

9）参照：大鹿實秋『維摩経研究』（平楽寺書店，1985年），186ページ．

10）前出，中村元『慈悲』，272ページ．

〈キーワード〉『維摩経』，『阿閦仏国経』，慈悲，菩薩，救済者，不二思想，浄仏国土思想

（大正大学綜合佛教研究所研究生）

新刊紹介

渡辺　章悟

『般若心経
—テクスト・思想・文化—』

B6版・376頁・本体価格3,000円
大法輪閣・2009年2月

NII-Electronic Library Service